

SAMURAI:Detective

——千五百八十九年、武蔵の国・山奥。

我が人生、剣と共にあつたといつても過言ではない。

今まで数多の剛の猛者を、この腕と剣のみで打ちとつてきた。これ以前も、これよりも我の剣の道、続いて行くのみ。我、この腕が動く限り剣を振るい、天命を待つ。自の剣を鞘から抜く。銘刀・焰……父の遺刀也。この刀を受けとりしその日から、この山中倉之助、武士道と共に生きることを決めたのだ。

それ以来、こいつとは長い付き合いになる。

この刀の円光は、我の歴史と見つけたり。反射光から見える我と、我に倒された猛者共の影……。此度の戦も、我に敗走の二文字は許されてはならないのだ。切り捨てた猛者衆のためにも、我自身の為にも……負けあらば、死あるのみ。

「それにしても……遅い」

我は、焔を鞘に戻した。

此度、ついぞあの男との決闘にこじつける事が出来た。おそらく、この乱世で最強と謳われる男。その名、真田円空。僅か十二にして、名門野木抜刀流筆頭に躍り、名声を轟かせていた奸漢。しかし、その実力故に弟子門下生の命を取り破門され、以降各地転々と旅を続け剣の道を極め続けていると聞く。……彼奴と剣を交えなければ、我に最強の座はないだろう。今宵、彼奴をこの焔で打ち破り、必ずや武の道に山中在り、と天下に知らしめてみせる。

その時、物陰から物音が聞こえてきた。

「……真田、円空か？」

しかし物陰から出てきた人物は、彼奴とは似ても似つかない、初老の翁だった。

「円空なら来んよ」

「……貴様が討った、とでも言うか？」

「……うん。そいでお主も同様に消えてもらいたい」
「……戯れ言を」

我は刀を抜き、切先を翁に向ける。

「貴様が真に円空を討ったのかどうか、この焔で問い正して見せよう」

「……うん。……愚かなり」

翁は懐から、木製の小箱を取り出す。

其の蓋を開けた刹那、目が眩むほどの青白い光が

私の辺りを覆った。

「なんだ……この光は……!!?」

「抵抗するな。……大人しくしておれ」

相手の生気だけを頼りに、私は焔を振るった。

「!!??」

刀は、虚しく空を切った。

空を切った刹那、そこにあつた翁の生気はおろか、
辺り一面から翁の生気は完全に消えていた。同時に
翁どころか、焔を振るった我自身の生気も消えかか
っていることに気づく。

摩訶不思議な……からくりだ。この現世に、か
のような力を持っている輩がいたとは……。次第に意

識が朦朧としてくる。よもや、我が手が焔を握って
いるのかどうかさえ、判別つかない。

「く……お……」

「せいぜい、楽しむんじやな」

どこぞから聞こえた翁のその言葉を最期に、我が
思考は、完全に無と化した。

2005年、東京都

「はあああゝ……」

今日も浮気調査、失敗しちゃった…。

ターゲットから警察に通報されるわ、依頼者からこっぴどく怒られるわ…。ホント、ついてない一日だったわ…。そもそも私、尾行とかって柄じゃないのよねえ。探偵たるもの、やっぱり難事件の解決でしよ。

犯人の念密なトリックを暴く、高度な推理能力！
逃走する犯人を捕まえる、強靱な運動神経！ 犯行を認めた犯人の哀しい過去を諭す、優しい心！
i n海辺！……運動神経以外は該当しないのは気のせいだ、うん。

ああ、一度やってみたいわあ……そんな推理小説みたいなこと。でも、意外と平和なのよねえ、この世の中。来る依頼は浮気調査や、家出人捜索とかば

つか……。そもそも何なのよ、浮気調査って。そんなの最初から浮気するなって話じゃない。依頼者も依頼者よ、本当にその人を愛しているなら、地を這ってでも証拠挙げてみせろっつーの。……まあ、そういう人達のおかげで、食べていけるんだけど。

「はあああ〜あ……」

父さんがいた頃はもっと大口の依頼も来てたのになあ。迷宮入りの難事件を解決したり、警察と協力して麻薬ルート押さえたり。……父さんが生きてたら、私だって……多分……こんな仕事なんかやってなかったのに。

「ようやく着いたわ……」

駅から20分もかかる事務所だけど、今日は30分ぐらいかかった気がする……。それだけ足取りが重かったってことかな……。私は、父さんが残してくれた事務所ビルを不意と見上げた。

「ここも、昔はもっと人で賑わってたんだけどなあ」

今では、人を探すほうが苦勞する。父さんが死んじゃってから暫くは、人気もあったんだけどなあ。名探偵……ジュニアの事務所として。

でも、この有様。結局私には、父さんのような才能は無かったってコトだな。それでも探偵を続けているのは……何でだろ。まあ、個人事業だから簡単に廃業なんて出来ないし、そもそもこの年で再就職は難しいし……。と現実考えてみると、惰性で探偵

ころかコンビニさえも近くに無いんだから。という事はホームレス？…それも無いと思う。ホームレスにしたって、普通は生活しやすい駅前を拠点にするもの。だとしたら…。

この男の人は……誰？

「……ぬ……ん……」

まだ息はあるみたいだわ……。

どうしよう？ 放っておく？ でもこの人、ずいぶん辛そうに躰されてるし……。

もしかしたら、どこか怪我をしてるのかも……。

「人として放っておくわけには……行かないわよね」

私は、その人の肩に腕を入れるとそのままテコの

原理で持ち上げてみせた。

想像してたけど……やっぱり重い。

「……ったく、感謝しなさいよ」

苦悶の表情を浮かべている、若い男性に呟く。

「……ん？」

腰のところあたりに、何か硬いものが当たっている。

これはひよつとすると……きやつ。なんて乙女やるほど私は若くない。

体勢を変えて、男の人の腰付近を見やった。

「……カタナ……よね、これ……」

冷静に男の人の身なりを見てみると、彼は洋服ではなく着物：のようなものを身に纏っている。もしかして、この人……。

「……ヤの字？」

結論が出せないまま、私は事務所玄関のドアを開けた。